

[平成 26 年度関西大学教育研究緊急支援経費における取組の成果概要]

申請区分	研究促進費
研究課題	中国隋唐音楽と日本雅楽 —林謙三先生記念企画—
研究代表者	文学部・教授・長谷部 剛
研究分担者	文学部・教授・中谷 伸生 文学部・教授・藪田 貫 文学部・教授・吾妻 重二 外国語学部・教授・内田 慶市 文学部・教授・山本 登朗 文学部・教授・森部 豊
研究成果の概要	
<p>本研究は、東洋音楽学者、林謙三(1899-1976)の音楽関係研究資料が関西大学図書館に寄贈されることを記念して、関西大学アジア文化研究センターにて「林謙三先生記念国際シンポジウム『中国隋唐音楽と日本雅楽』」を開催し、林謙三の東アジア音楽研究を再検討することを目的として遂行された。</p> <p>実施代表者の長谷部は、科研費・基盤(B)「隋唐楽府文学の総合的研究」最終年度の総括として、平成 26 年度に中国隋唐音楽に関する国際シンポジウムの開催を当初より予定していた。本学関西大学の学問上のルーツである泊園書院に係る、東アジア音楽についての研究を緊急的に遂行し公開する必要性が生じたために、教育研究緊急支援経費を得て、本来予定していた国際シンポジウムを「拡大」させて開催することとなった。</p> <p>国際シンポジウムは平成 26 年 10 月 26 日に開催された。前半の科研費によるシンポジウムでは、中国・上海音楽院の陳応時教授による講演「『隋唐燕楽調研究』の独創性」、国立台湾大学音楽学研究所の沈冬教授による講演「林謙三の東アジア音楽研究」が行われた。そして、今回の教育研究緊急支援経費による後半部は、「雅楽演奏会 — 雅楽と林謙三一」と題して、遠藤徹（東京学芸大学教育学部准教授）の構成・解説のもと、伶楽舎が以下の曲を演奏した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.平調 三台塩急 2.琵琶独奏 黄鐘調手弾(『南宮琵琶譜』より) 3.双調 柳花苑(仲呂均商調の音律に基づく推定復元) 4.箏独奏 双調搔合(『仁智要録』より) 5.黄鐘調 皇帝三台(『博雅笛譜』より、雅楽寮の楽器編成による推定復元) 	

遠藤准教授の解説および伶楽舎の演奏によって、林謙三の日本雅楽の復元研究の実態が明らかとなり、関西大学図書館の収蔵となる林謙三の音楽関係資料の重要性も十分に証明することができた。読賣新聞 2014 年 10 月 20 日夕刊でも報道されたこともあり、シンポジウム・演奏会当日は 162 名が集う盛会となり、しかもその中には日本音楽研究者が多数含まれた。これら日本音楽研究者とは、シンポジウム当日も林謙三の音楽関係資料の整理・評価について意見交換することができ、また今後の共同研究の可能性をも検討されている。結果的に、今回のシンポジウムによって、関大の財産となる林謙三の音楽関係資料の学術的価値を対外的に周知できたことは極めて大きな成果であったと断言できよう。

さらに特筆すべき成果がある。当日の講師として招いた遠藤徹（東京学芸大学教育学部准教授）とは、今回のシンポジウムの企画・運営の過程で、林謙三の音楽研究について情報交換することが多く、結果として、シンポジウム終了後、平成 27 年度の日本学術振興会科学研究費補助金に申請し、林謙三の音楽研究を中心に据えて日本・中国の古代音楽について共同研究を進めることが計画された。そして、平成 27 年 4 月に、科学研究費補助金・基盤研究（B）「隋唐燕樂歌辞の文学的・音楽学的アプローチによる双方向的研究」（研究代表者：長谷部剛）が採択された。科研費の大型研究である基盤研究（B）が採択されたのは、今回の教育研究緊急支援経費を得て遂行した一連の研究活動の新たな成果である。

研究成果の公開状況

申請区分	教育促進費
研究課題	ハイパー・リスク社会の防災対策:システム思考と省察的实践
研究代表者	社会安全学部・助教・城下 英行
研究分担者	
研究成果の概要	
H28 に研究報告	
研究成果の公開状況	

申請区分	教育促進費
研究課題	3学部連携による関大前通をフィールドとした地域まちづくり実践教育
研究代表者	環境都市工学部・准教授・岡 絵理子
研究分担者	
研究成果の概要	
H28 に研究報告	
研究成果の公開状況	

申請区分	教育促進費
研究課題	海外大学との国際遠隔交流学习活動を導入した教育カリキュラムの構築 ～次世代グローバル人材に必要な語学力・異文化コンピテンスの養成～
研究代表者	国際部・准教授・池田 佳子
研究分担者	
研究成果の概要	
H28 に研究報告	
研究成果の公開状況	

申請区分	教育促進費
研究課題	文理融合型プロジェクトの推進による食の革新のための事業イノベーション創出
研究代表者	商学部・教授・荒木 孝治
研究分担者	化学生命工学部・教授・河原 秀久
	商学部・教授・川上 智子
	商学部・准教授・西岡 健一

研究成果の概要

本プロジェクトの主な実施事項を次に示す。これらの活動の中で、理工系学部と社会科学系学部との協同、および、企業・産業界との協同により、新しい教育の方法および方向を開拓することができた。さらに、学生がもの（今回は食品であったが）をデザインし、作り、販売するという実世界での総合型のプロセスを体験するための教育プロトタイプを作ることができた。

- ・2014年9月27日(土) ビジヨナリーWS 関西大学 C301 教室 (14時40分～16時10分)
- ・2014年10月1日(水) スタートアップWS 関西大学 A503 教室 (13時30分～15時30分)
- ・2014年11月30日(日) プログラスWS グランフロント大阪・アクティブスタジオ (13時～17時)
- ・2014年12月17日(水) ファイナルWS グランフロント大阪・ナレッジシアター(15時～18時30分)
- ・2015年1月22日(木) 第19回関西大学先端科学技術シンポジウム・成果発表セッション

「期待される成果・関西大学への貢献」の項に記載した内容で具体的に述べると、「プロジェクト形式の教育基盤」「イノベーションやデザイン思考をキーワードとする教育内容・教育方法」「他大学に類を見ないアントレプレナー教育の手法」「関西大学のプレゼンスおよびブランドを高めるための有効な活動」の一定の方向性を示すことができた。また、「関西大学ブランドの商品化」に関しては、本プロジェクトに参加した学生の11チーム（計50名）が考案した11商品案のうち、いくつかが発売予定である（下記（B）参照）。

本プロジェクトに関連した具体的な成果で、公開したもの（予定を含む）を次に示す。

(A)公開した成果

- (1) 荒木 孝治・川上 智子・西岡 健一「文理融合型プロジェクトに基づく学習の推進」第19回関西大学先端科学技術シンポジウム，2015年1月22日（木），関西大学100周年記念会館。
- (2) 河原 秀久「加工食品の物性を制御するエノキタケ接着タンパク質 | シーズ提供 |」第19回関西大学先端科学技術シンポジウム，2015年1月22日（木）関西大学100周年記念会館。
- (3) 西岡 健一・荒木 孝治・川上 智子「商学部学生によるビジネスモデルの創生」第19回関西大学先端科学技術シンポジウム，2015年1月22日（木）関西大学100周年記念会館。
- (4) 松井 博司（大手前大学総合文化学部教授）「『食』とりわけスイーツに関する最近の動向」第19回関西大学先端科学技術シンポジウム招待講演，2015年1月22日（木），関西大学100周年記念会館。
- (5) 川上 智子「社会人基礎力を培い、新しい価値を創造するビジネス教育」岩崎千晶編著(2014)『大学生の学びを育

む学習環境のデザイン—新しいパラダイムが拓くアクティブ・ラーニングへの挑戦』関西大学出版部

(6) 川上 智子「マーケティングとオープン・イノベーション—顧客との価値の共創—」次世代経営者塾オープンセミナー, 2015年1月28日(水), グランフロント大阪

(7) 「『関西大学イノベーション対話プログラム Newsletter』 Vol.1, Spring 2015

(B)学生による成果

(1) ベジチョコ, 大手前大学スイーツ・ラボ, 2015年2月8日発売

(2) パン「おもぬくもりパン」白はと食品(株), 近日発売

(3) そば「KUUDLE 関麺」(株)おびなた, 近日発売

(C)成果報告書(非公開)

企業との共同プログラムの内容で, 守秘義務次項が含まれるため, 非公開とする.

(1) 『平成26年度関西大学教育促進費報告書 文理融合型プロジェクトの推進による食の革新のための事業イノベーション創出』(約180ページ)

(2) 学生配布用成果報告書((1)の短縮版, 約100ページ)

研究成果の公開状況

申請区分	国際シンポジウム
研究課題	the 2nd International Smart Infrastructure Symposium at Kansai University 2014 in collaboration with University of Cambridge
研究代表者	環境都市工学部・教授・小林 晃
研究分担者	環境都市工学部・特任教授・大西 有三 総合情報学部・教授・田中 成典 環境都市工学部・教授・坂野 昌弘 環境都市工学部・教授・滝沢 泰久 環境都市工学部・准教授・窪田 諭 環境都市工学部・准教授・安室 喜弘 環境都市工学部・准教授・島田 広昭 社会安全学部・准教授・小山 倫史
研究成果の概要	
<p>我が国では高度経済成長期に社会インフラが集中的に整備され、これらのストックが建設後 30～50 年経過していることから、国および地方自治体とも今後急速に老朽化が進行すると懸念していることは周知のとおりである。こうした中、平成 24 年 12 月に、笹子トンネルの天井版崩落事故が発生、多くの犠牲者が出て、世の中にインフラ施設の老朽化が注目の的となり、維持管理、そのベースとなる点検の重要性が認識された。また昨年度から今年にかけて、マスコミでも連日のように、インフラ施設のほころびが報道されている。</p> <p>そのため、政府は社会インフラの適切な維持管理の実現を早急に目指すことを表明、それを受けて、国交省は対応する施策を発表すると共に地方公共団体管轄を含むインフラ施設の 5 年ごとの点検を義務づけようとしている。しかし、高度な点検・モニタリング技術、スマートセンサー対応技術、社会インフラの健全性の診断・予測する手法などの開発は十分ではなく、それらの技術を使ってインフラの想定寿命と限界状態を明らかにしたうえで定量的な評価と予測に基づくアセットマネジメントの導入も道半ばの状況である。</p> <p>国の動きに対応して緊急的に企画された本シンポジウムでは、学術的かつ産学連携の立場から 2 年前に行われた同趣旨の第 1 回 Smart Infrastructure Symposium を拡大し、本学とケンブリッジ大学関係者が中心となって、インフラ施設の維持管理、とくに先進的なモニタリングに関して土木技術関係者だけでなく、ICT、リモートセンシング、情報通信、画像処理など多くの異分野の関係者が国際的に寄り集まって、安全・安心な国民生活を支えるレジリエントな社会の構築に必要な先進的技術について講演とディスカッションを行い、その成果を社会に還元することを目的とした。</p> <p>シンポジウムは 9 月 26、27 日の 2 日間、関西大学尚分館マルチメディア AV 大教室にて、160 名を超える国内一般参加者が集い行われた。成果発表はケンブリッジ大学をはじめ海外から 6 名の研究者と日本の 14 名の研究者からおこなわれ、最先端の研究成果の報告がされた。シンポジウムでは日本および世界の状況について情報交換を行い、今後のモニタリングのあり方について議論がなされた。また、国内企業 5 社からの各種モニタリング装置の展示も</p>	

なされ、国内参加者及び海外の研究者からも興味深い視線を集めた。

国内からの参加者は大学、企業、官庁と幅広い分野からあり、規制、実務、研究開発という様々立場からの発言があり、インフラの維持管理の在り方について有意義な議論がなされた。

研究成果の公開状況